

6 イネツトムシの最近の発生動向と防除対策

ねらいと成果

イネツトムシ（イチモンジセセリ幼虫）は兵庫県南部地域において6月移植水稻の重要害虫である。被害の発生は7月下旬～8月中旬の第2世代の幼虫によるものが多い。最近の被害実態をまとめ、水稻の品種の変遷との関係を考え、県南部で被害の多い6月移植におけるフィプロニル粒剤の移植時箱施用が高い防除効果を示すことを確認した。

内容

1969年～2001年の発生予察調査結果から調査地点数に対する幼虫の発生が認められる地点の割合を発生地点率とし、また、ツト数が100株当たり40以上認められる地点の割合を被害地点率としてまとめた(図)。その結果、1982年まではイネツトムシの被害が多かったが、1987年以降発生は認められるものの1994年に被害が多かっただけで、近年、被害が少なくなってきた害虫といえる。被害が少なくなった要因としては、成熟期の早い品種の栽培が増えたことや、移植時期が早まったことにより第2世代の幼虫が多くなる7月下旬には、餌として不適な硬い葉の稲が多くなってきたためと考えられる。

1998年に5月8日、5月28日、6月18日移植の「どんとこい」を用いて、フィプロニル0.7%粒剤の1箱当たり50gの移植時箱施用の防除効果を検討した。8月5日に100株当たり在幼虫ツト数を調査したところ、5月8日移植は第2世代幼虫による被害はなく、5月28日移植では在幼虫ツト数は無処理区で4.9、処理区で1.0と少なかった。6月18日移植で

は無処理区で54.7、処理区で2.0と高い防除効果を認めた。このように県南部地域では5月移植栽培ではイネツトムシの発生が少なく防除は必要ないと考えられる。6月移植の場合、フィプロニル粒剤の移植時箱施用で、セジロウンカ、トビイロウンカとの同時防除が可能で、十分な防除効果が期待できる。

今後の留意点

2001年の発生状況では第2世代幼虫の発生時期が7日程度早かった。このような年は被害の増加がみられるが、フィプロニル粒剤の防除効果は十分であった。

また、近年、越冬地域は北への拡大がみられる。県北部で第1世代幼虫による被害に注意する必要がある。

山下 賢一（病害虫防除所）

表 移植時箱施用によるイネツトムシの防除効果
(数値は8月5日調査の100株当たり在幼虫ツト数)

移植期		フィプロニル0.7%粒剤	無 処 理
5月 8日	幼虫	0	0
	蛹	0	0
	合計	0	0
5月28日	幼虫	0.5	2.8
	蛹	0.5	2.1
	合計	1.0 (80)	4.9
6月18日	幼虫	1.6	41.6
	蛹	0.4	13.1
	合計	2.0 (96)	54.7

()内数値は防除価

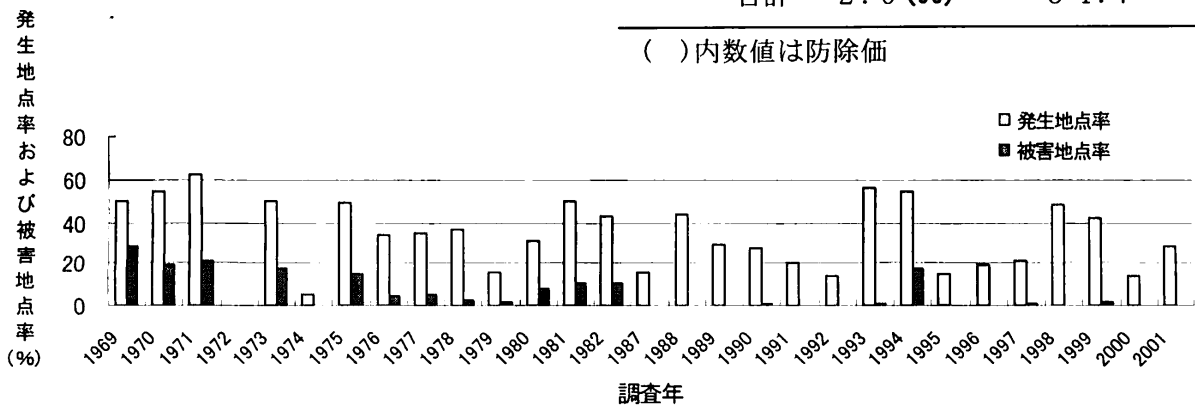


図 兵庫県におけるイチモンジセセリ幼虫の被害推移（発生予察巡回調査結果より）